

〒260-0031 千葉県千葉市中央区新千葉2-17-6

サンコート新千葉102号

E-mail:kidchiba@ily.ocn.ne.jp

TEL:043-301-7262 FAX:043-301-7263

発行責任者：特定非営利活動法人 子ども劇場千葉県センター

2026年7月10日発行 第112号 1部100円 <https://chiba.gekijou.org/>



生涯の幸せを育てる「はじめの100か月の育ちビジョン」

～幼少期までの子どもの育ちに係る基本的なビジョン～

妊娠期から小学校1年生までがほしい1000カ月、この時期に子どもは様々な人やモノ、環境とのはじめての出会いを繰り返し育っていきます。「はじめの1000カ月」は生涯にわたるウェルビーイングの向上につながっていく大切な時期です。



県や市町村行政では、こどもの権利、尊厳を重視した「こどもまんなか社会」を目指す「こども基本法」の基、「こども計画」を策定し、当事者（子ども・養育者）の声を聴いて子ども施策をすすめて、1年が経過しようとしています。

令和6年度の千葉県の虐待対応件数は12,063件で、前年度より325件の増加、小中不登校児童生徒14,599人で前年度より299人の増加と、歯止めがかりません。こども計画にこうした課題を解決する具体的な計画を盛り込むことが必須です。

また、子ども・子育ての課題解決をめざしているNPOとして、子どもや養育者を丸ごと受け止めて支え合う地域や、子どもが豊かに育つ生活文化環境を創る使命を果たします。

子ども劇場千葉県センターの事業は、すべて「こども基本法」の理念に叶った事業です。27年間、子どもの声を聴き続けている「チャイルドライン千葉」、養育者に寄り添う「ママパラインちば」には、不安や孤立等のリアルな声が届きます。傾聴事業では、こうした当事者の声を社会に発信し、課題解決に活かすように努めます。

団体正会員と共に、学童期・思春期の主体的

な自己表現力、コミュニケーション力、自己肯定感が醸成される時期において、「生きる力」を育てるために、芸術の力を活用した体験活動が有効であることを強く発信し、学校・地域・児童福祉施設・病院等、どんな状況の子ども達にも体験の格差のない環境づくりを推進していきます。

「こども家庭庁」は、こどもがまんなか社会は、全ての人のウェルビーイングにもつながるとし「はじめの100か月の育ちビジョン」を策定しています。子ども劇場千葉県センターはこの理念に賛同し、様々な個人や団体と連携しながら、県内中に拡げていくことを、2006年度の事業計画として掲げました。

これまで行政や地域の子育て団体との連携で実施している、アートを活用した子育てプログラムは、0歳から2歳児の親子の愛着形成や、非認知能力を育てる子育て支援事業で、「はじめの100か月の育ちビジョン」の理念と合致していることから、今後視野を広げて、乳幼児をまんなかに、異世代でふれあいまちづくりの事業へと、連携や支援者を広げていきたいと思っています。

(理事長…宇野京子)



2026年度の事業計画

●文化芸術を活用し、子ども自身の自己肯定感・非認知能力を獲得する活動

①子どもゆめ基金助成事業

- *「病院や児童福祉施設の子どもの主体的に創造しワクワクするQOL向上あそび体験交流2026」10か所
- *「児童福祉施設で暮らす子どもが笑顔になる自己肯定感向上あそび交流2026」9か所
- *「出前で届ける子どものあそびアート*交流体験2026」3か所

●文化芸術を活用し行政・地域連携の子育て支援活動

- ①「乳幼児親子のウェルビーイング向上のためのネットワークづくり」5市
- ②「はじめの100か月の育ちビジョン推進プロジェクトちば」立ち上げ準備
- ③乳幼児連携事業

●子どもや養育者に寄り添い「傾聴」による当事者を支える活動

- ①チャイルドライン千葉
- ②ママパラインちば

●ネットワーク事業

子ども系NPO、行政、個人、こども人権ネットちばとの連携

2026年度（第29年度）

通常総会終了

日にち：2026年6月18日(木)
時間：13時00分～15時00分
場所：千葉市民会館特別会議室2
正会員総数：43名

出席者数：出席 32名 委任 11名
すべての議案が賛成多数で承認されました。

■2年間の事業の重点課題として、全ての事業に、子どもの権利条約の理念と子ども観を入れ込んでいくことが確認されています。



できる時に できる人が できることを



保育園って児童福祉施設として、いつ来てもいいんだよ、いつでもおいでと、こちらから投げかけても意外と来づらいものなんです。今日はお近くの様々な施設と繋がってもいいんだということを持ち帰っていただけたら嬉しいですね。

法人格を取る時職員と話し合い、家族には卒園がない、いつでも来ていいところ、それって家族だよなって…。ここはいつでも誰でもいくつになっても来ていい場所「大きな家族」なんです。

大きな家族って？

保育士からスタートし、当時の一斉保育になじめない中、子どもたちのために頑張ったが腰を痛め退職。リハビリを兼ね、泳げない私はスイミングスクールに通い数年かけて、ダイビングインストラクターとなる。（すごい！）その間、高齢者など多くの人との出会いとかかわりがあったが、やはり保育への思いを達成させたいと思うようになった。そのためにはやらなきゃいけない手段があることに気づき、命の重さを痛感する体験等を経て、民間の子どもルームや保育ママ、ファミサポやショートステイ、海外出張等の家族のお子さんを預かるサポートをした。その後千葉市で、子育てで困っているママ、手が必要としている保護者の方々など、いろんな人が自由に出入りできる事業を展開し今日に至る。

★エネルギーッシュでパワフルで驚くばかりの間山さんの略歴



取り巻く状況に潜む課題



- ◆子ども：個々の育ちの差、特性、障害等
- ◆保護者：保護者の成育歴、疾病、障害、特性
- ◆家庭：ひとり親、夫婦、嫁姑、多胎児、経済面
- ◆社会：社会的孤立、就労

- ・不安⇒自信なし、方法がわからない
- ・負担⇒目が離せない育児、身体的疲労
- ・不足⇒対話等の不足、情緒、パートナーの非協力
- ・不調⇒子どもの育ちとと思った育児の違い、良い子像
- ・不適切⇒しつけ、過干渉、過保護

SOSを出せない保護者が増え、 こちらが（保育者）気づいて支援に結びつける

最近パパ、ママとも互いの関係性をどう保つかという相談や、自分を大切にできなくなり、「自分は何なんだろう」と悩むなど、子どもの育ちだけでなく周りとの関係性や、自分自身が抱える問題で困っている保護者がいます。また、何かに困っていてもSOSを出せない保護者も増え、こちらから見つけること、こちらが気づくことが必要になっています。

その時「どうやって（問題解決）よりも、どうして（背景）」を共に考えて、支援に結びつける事が求められ、大人も人間であり、心があり感情や価値観は異なるので、出されるSOSに専門性を持って向き合う支援が求められます。子どもの生活と発達を支える環境の質を保持するためには、家庭と保育園が連携し、地域との関係づくり、安心安全の信頼関係を構築することが不可欠です。

保育園は3つの指標と5領域を保障

0歳からの「身近な人と気持ちを通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」「健やかに伸び伸びと育つ」この3つの指標と、1歳からの『人間関係・表現・言葉・健康・環境』の5領域を基本に置き、どの子も心身健やかに育つ環境を整え、日々の育ちを大切に、育ちの保証をするところです。環境が子どもたちを育てるので、やりたいこと、その子の思いを身体表現することがとても大切です。

誰かと接する時大切なことは、人として接すること、社会で共に生きていることを伝え合うことです。子どもたちは多様な人との出会いのもと成長していきます。しかし昨今の子どもを取り巻く状況には多くの課題が潜み、育てにくいといわれる子の増加やワンオペ育児、経済的困難、保護者の疾病、社会的孤立などから不安、不適切な対応、負担と困難の大きい中で子育てと向き合う人も増えていきます。



保育園は家族全体のウェルビーイングを支える拠点となり、包括的な社会資源とならなければならないと思います。

はじめての100か月の育ちビジョン

こども基本法の理念にのっとり整理した5つのビジョン

01 こどもの権利と尊厳を守る。

すべての子どもに権利があります。こども一人ひとりの想いや願いを大切にします。

02 「安心と挑戦の循環」を通じて、こどものウェルビーイングを高める。

こどもは、おとなの「アタッチメント（愛着）（安心）」を土台として「遊びと体験」（挑戦）を繰り返しながら成長していきます。

03 「こどもの誕生前」から切れ目なく育ちを支える。

こどもの成長に応じた環境の変化が育ちの「切れ目」を生まないように、すべての関係者で連携して育ちを支えることが重要です。

04 保護者・養育者のウェルビーイングの成長の支援・応援をする。

こどもにもっとも近い存在の保護者・養育者がこどもとともに育つことができるように、様々な人や機会で支えていきます。

05 こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す。

子どもや子育てに直接かわりがある人もない人も、すべての人がこどもの育ちにとって大切な役割を担っています。

求められている支援の多様性

健やかな育ちのためには、子どもをまん中にした支援計画が必要となります。たくさんの人が互いに補い合う社会、保護者、地域、行政、医療・福祉・教育関係者、皆で支援するタスクを組むことが不可欠です。ママができないなら補い合う、一人じゃないよと寄り添う。支援は多様性を求められています

「家族まるごと支援」の重要性は増す

子どもを取り巻く様々な問題は、成長発達への影響を与え、家族全体の包括的支援が必要とされています。保育園は日常と直結している中で、信頼関係を築き、必要に応じて行政や関連機関、時には他県の機関とも手を繋ぎます。孤立させない継続的支援をして、子どもの育ちの改善に結びつけ家族のウェルビーイングを支える拠点となります。こども家庭庁「はじめての100か月の育ちビジョン」は、妊娠期から小1までを大切な時期とした重要な施策です。

赤ちゃんにも意思を聴く

子どもの力は大人が思うより大きい

「誰もが一人じゃないよ」と感じ合い「みんなが大事」と思う中で育つ子どもは、たくさんの人に愛され、愛する子になり、ぬくもりを感じ、かわりを広げながら育っていきます。

例えば子どもを尊重することは、おむつ替え一つとっても、パップと替えてしまう前に赤ちゃんに「おむつ替えていいかな」と赤ちゃんの意志を聴くことで、やり取りのコミュニケーションを積み重ね、自分は大切にされていると感じ取り、心の育ちにつながります

相手とやり取りする1歳児、親に気を遣う2歳児、心でお話しする3歳児、聞いてよ・認めてほしい4歳児、話し合って決める・自分の考えだけではないことを知る5歳児と、子どもの持つ力は大人が思うより大きく、乳幼児の時から脈々と育まれています。



卒園のない「大きな家族」丸ごと支援への願い…間山さんのコメント

★夫婦は、父と母になるために一緒になったわけではありません。家族というのは新たに作り上げられていく小さな社会なのです。だから大きい人も小さい人もみんな大事で、命の尊厳をみんなが意識していくこと、そのための支援「みんな一人じゃないよ」を感じていくことが大事なのです。

★これからの「こどもまんなか社会」を考える中で、安心・安全・安定を保障し地域のつながりを大切にしていかなければなりません。家庭問題、虐待、障害を抱えた子どもや家族などがいる中、国や行政の動きも「こどもまんなか」へと動き出しました。が、まだまだしつかりとした機能を果たすまでには至っていません。社会から子どもの姿が見えにくくなっているようにも感じます。

★子どもにかかわる方々への支援なども24時間必要で、ひとりの子どもを真ん中に、関係機関がどのようにに共働できるかが「子どもの最善の利益」「今の幸せがつなげる未来」を左右していくのではないかと思います。地域の中で手を取り合い、輪を広げて繋がっていく手段を考えていきたいです。

★おなかに命を宿した時の喜びを大人が忘れず、子どもたちと共に「小さなほっこり幸せの積み重ね」を地域みんなで作り上げ、笑顔やぬくもりを感じるホッとな関係を築いていきたいと思っています。

★大きな人も小さな人も同じ一つの命。違いを認め合い、すべての人が互いの人権と尊厳を尊重しあいながら生きていく社会、小さな幸せを積み重ね、違いを認め、公平な支援をしていくインクルーシブな社会を目指していきましょう。

千葉県・市町村の「こども計画」が次々に施行された今 改めて「こどもまんなか」って何？今知っておきたい「こども基本法」とその背景

「子どもは自分に関係ある事柄について自由に意見を表すことができる権利」は「Rights to be heard（聴いてもらえる権利）」であることを、参加者も意見を出しながら、西崎さんの豊かな実践から学びました。



にしざき めぐみ
講師 西崎 萌さん

2022年8月、内閣官房こども家庭庁設立準備室・こども家庭庁アドバイザー（長官官房総合政策担当）
2023年11月、一般社団法人Everybeing 立ち上げ、共同代表
全国子どもアドボカシー協議会理事
文教学院大学非常勤講師

基本法ができる前は、福祉については子どもの権利を、体罰はしないようにしましょう、暴力は禁止、貧困対策に関しては子どもの権利を保障していきましよう、子どもを取り巻く環境の一部分、一部分、パッチワークのようにパズルのピースを当てはめていくように子どもの権利を子ども政策に入れていました。

翌2023年創設されたこども家庭庁の調査では、子ども基本法の理念である子どもの権利条約を「どんな内容がよく知っている」「すこし知っている」「名前だけ聞いたことがある」と回答した割合は、小学生（16.8%）中学生（32.0%）高校生（67.1%）大人（53.2%）「聞いたことがない」という回答者が最も多く、おとなの約半数が「聞いたことがない」と回答しています。

2022年に「こども基本法」ができました。

私は、大学を卒業した後2年教員をして、大学院で教育学修士をとり、セイブ・ザ・チルドレンというNGOで8年間子どもの権利に関わる政策提言をしてきました。その中で子どもの権利手帳を作ったり、こども基本法を作ったり、子どもの貧困対策や虐待防止法改正などに携わり、2022年からこども家庭庁のアドバイザー、また、自分で団体を立ち上げて仕事をしています。3人の子育てをしている中で、こどもの声を聴く経験談も交えてお話しします。

★「こども基本法」は、ちゃんと横ぐしを通して、子どもに関するあらゆることについて子どもの権利を保障している「こうね」という法律です。

2023年、こども家庭庁の創設とこども大綱の策定、こどもまんなか実行計画が策定され、計画のつとめて、毎年毎年子どもの権利保障がされるように政策が進められています。

なぜ、こども家庭庁ができたのでしょうか？

2020年、コロナ禍の時一斉休校があつて、大人は制限はあつたけれどまだ緩い環境だったが、子どもたちは「学校に行つてはいけません」「外に出てはいけません」と、すごく生活が制限されました。そのひずみから、虐待や貧困家庭、自殺、こどもの多くの問題が顕在化。子どもの危機がやつと政治的にも認識されこども家庭庁ができました。

千葉のこども計画の中にも入っていますが、どうやってこどもたちの声を聴いていくか、こども基本法で目指しているところをどう実現していくか、お話ししていきたいと思っています。

みなさんは「こどもまんなか」って聞いたらか？（参加者が席の近くで自由に話し合つて発表した）

- A. 今まではこどもがそもそもいなかった、だから中心に出てきた。
- A. （力関係で）大人が上の方にいたから、大人が少し下がって子どもの目線に合わせる。
- A. 子どもに力を持たせて大人と同じところに子どもが上がる。
- A. 家の中で親と子どもが話すというのが一つの社会。家族の中心に子どもがいる。

【西崎】私はこの言葉をつくる場にいましたが、当時小2年生くらいの子どものみに聴いたところ、「こどもまんなかって、東京に子どもがみんな集まってくるってこと？」と言われた。（笑い）



★「こどもまんなか社会をつくりましょう」というメッセージ自体が大人目線だった、と気づきました。

大人は自分ではいいことしていると思っ
ても知らず知らずに大人側の目線になっ
ていて、まず子どもたちの目線はどうな
っているのか考える必要があります。

社会のどこに行っても、「こどもまん
なか」と言わなくても子どもと大人が
一緒に楽しんでいることを目指して、
子どもたちを取り巻く社会の問題が
可視化されてなかったところから、一
歩進んで見えるようにして、子ども
と大人が自然に融合しているような
社会を目指すプロセスの途中に
いる言葉なのかと考えます。

改めて「こどもまんなか社会」とは？

子どもの声や気持ちが聴かれ尊重さ
れる、すべての子どもが大切にされ
る社会、多様性が尊重される社会
です。子どもを守るだけでなく、
社会を構成する対等な存在として
子どもをちゃんと見ていこうと
大人が意識している、という
キャッチフレーズです。



大人から見た子どもにとって「最も
良いこと」と子どもから見た「最も
良いこと」が違ふことがある。子
どもの権利の視点で見る「大人の
よかれ」になっていないか？何より
も、児童一人一人を「子どもの権利
の主体」として見るのが大事



子どもの心の声を聴くための5つの基本姿勢

©Everybeing2025

1. 「Opinion（意見）」ではなく「Views（視点）」を聴く
○論理的にまとめた主張だけでなく、遊んでいる時の「つぶやき」や「感覚」も大切な声として拾う。→子どもが声を出することができる工夫（折り紙、お絵描き、立体模型、ごっこ遊び）
2. 「評価」を捨てて「受け止め」に徹する
○「すごいね」「いい意見だね」は言わない。「正解探し（忖度）」を防ぎ、中立的に受け止める。
3. 「無理」と切らずに「背景」を掘り下げる
○突拍子もない夢や「あれがほしい」「これがほしい」も否定せず、「なぜそう思うの？」と奥にある願いを探る。
4. 「大人」の鎧を脱ぎ「フラット」に
○「小学生なのにそんなこと思いついたんだ！すごいね！」といった無意識の上から目線を排除。
5. 「沈黙」もひとつの表現として守る
○とにかく忍耐力（6秒、待つ）
○話さない＝意見がない、ではない。
○書く、描く、ただ居ることも尊重し、無理に発言させない

子どもの声を聴くこととは

国の範疇にある「子どもの意見反映」です

子どもを取り巻く社会は、家族や学校の先生・友
だちなど身近な人間関係から、学校、園、フリース
クール、居場所、その先に地域社会、もっと遠い所
に子どもに関する政策とか日本の文化、すべて含
めて子どもの社会環境です。こども基本法で言わ
れている「こどもの声を聴く」というのは、こども
政策について決める時にはこどもの「声を聴きま
しょう」ということです。

こどもに近い環境のところでこどもの声が聴かれ
ることによって、こどもたちが自分の声にはちゃん
と影響力がある、何か話したらその声が尊重されて
自分の環境が変わっていくな、と思えることが大事
です。

子どもの声を聴くとき、どんな場面がある？

● 拒絶・諦めに見える言葉や態度

- * 「別に」「どっちでも」「なんでもいい」
- * 「めんどくさい」「わかんない」
- * 「相手の」好きな方がいいよ」「（相手の）楽なものでいいよ」

声が聴かれない経験が積み重なっている、ど
うせ言っても無駄だなと思っている可能性があり
ます。こちら側がちゃんと「声を聴けるよ」とい
うことを示していくことが大事です。考えるサポ
ート、一緒に決めていくサポートも必要。

● 撤回・沈黙に見える態度

- * 「やっぱ大丈夫」「なんでもない」
 - * 「・・・」（沈黙して話さない）
- 言ってみただけやっぱりやめておこうと自分が傷
つく前に撤回してしまう。「えっ？」て大人が聞き
返しただけで、ダメだと言うことだと思って撤回し
てしまう。



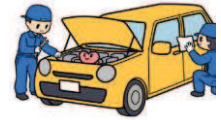
★子どもの権利は、子どもたちが日常の中で体
感していくことが重要で、本や絵本の世界を通
して学んだり、関わりの中で見せていくことで、
理解していくことができると思います。



心を育てる体験の力 — 「はじめの 100 か月の育ちビジョン」から考える子どもの育ち

船橋青い空こどもクリニック院長

松本 歩美



「はじめの 100 か月の育ちビジョン」に注目が集まっています。妊娠期から小学校 1 年生ごろまでの約 8 年間で、生涯にわたる幸福や健康、人との関係性など、人生の土台が作られる大切な時期だとされています。私もこの考え方に共感します。子どもたちの未来を支えるために本当に大切なことは、安心できる環境の中で心と体の土台を育むことだからです。

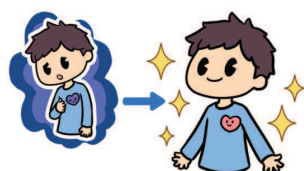
さて、子育てのゴールはどこでしょうか？

診察室や講演などでは「親がいなくても楽しく心豊かに生きていけるようになること」、つまり「自立」とお伝えしています。自立とは一人で何でもできることではありません。困ったときに助けを求めたり、人とつながったりし、自分の人生を主体的に歩んでいける力です。

こどもの自立を支える要素を「車」に例えて説明します。

最も大切なのは、車を動かす「エンジン」にあたる「心」です。どれほど性能の良い車でも、エンジンがなければ前に進むことはできません。生きるためのエンジンは自己肯定感です。自己肯定感とは、「生まれてきてよかった」「ここにいていい」「自分は大丈夫」と思う力です。失敗しても立ち上がる力、人と関わる勇氣、新しいことに挑戦する意欲は、この自己肯定感から生まれます。

自己肯定感は一度育てれば終わりではありません。失敗したり、否定されたり、傷ついたりすることで簡単にしぼんでしまいます。だからこそ、毎日少しずつ心の栄養を補給する必要があります。その方法は決して難しいものではありません。「頑張ったね」「大変だったね」「嬉しかったね」という言葉の積み重ねが、子どもの心のエネルギーになります。赤ちゃんの頃には自然に「お腹すいたね」「気持ちいいね」と声をかけていたはずですが、その関わりを成長に合わせて続けていくことこそが、折れない心を育てる第一歩だと考えています。



同じく大切なのが、「車体」にあたる「体」です。どれほど強い心を持っていても、体調が整わなければ本来の力を発揮することはできません。子どもの健康を支える基本として、生活習慣の重要性を繰り返しお伝えしています。

睡眠・食事・清潔。こうした当たり前のことが、自律神経を整え、病気やストレスに負けない体をつくりまします。特に睡眠は、体だけでなく心の安定にも直結しています。

「カーナビや高度な性能」にあたるのが学力や運動能力などのスキルです。学力や運動能力は人生をより豊かにします。勉強やスポーツに必要な集中力や継続力、挑戦する力は、自己肯定感というエンジンと健康な体という車体があって初めて育まれます。

近年は、デジタルメディアとの付き合い方も

大きな課題になっています。

スマートフォンやゲームは使い方を誤ると、睡眠不足や運動不足、コミュニケーション機会の減少につながることがあります。ですから、子どもたちには豊かな実体験を重ねてほしいと願っています。外遊び、友達との関わり、自然に触れること、積み木や工作に夢中になること、そのような経験の中で、子どもたちは考える力や感じる力、人とつながる力を育んでいきます。

芸術を通して生まれる驚きや共感、仲間との時間は、自己肯定感や他者を思いやる力を育む大切な栄養となります。子ども劇場千葉県センターさんが取り組まれてきた活動は、かけがえのない役割を果たしていると感じています。

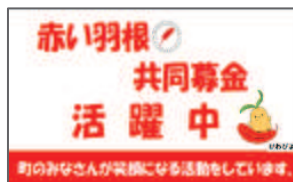


子どもの未来を支えるのは「人とのつながり」と「心と体の土台」です。家庭だけでなく地域や社会全体で子どもたちを見守ることができれば、

「はじめの 100 か月の育ちビジョン」が目指す社会は実現に近づきます。子どもたちが自分らしく成長し、生き抜く力を育めるよう、これからも皆さまとともに歩んでいきたいと思っています。



赤い羽根共同募金は、民間福祉団体からの助成申請をもとに、福祉関係者や有識者などで構成される「配分委員会」で審査のうえ、助成計画を立案し、その計画に基づいて、助成事業に必要とされる「目標額」を定めて募金活動を実施します。みなさまの寄付が団体への助成額に直接反映される取り組みです。「チャイルドライン千葉」と「ママパパラインちば」の傾聴事業が「傾聴のラインを知らせる広報事業」として選ばれました。



皆様の温かい募金とご支援・ご協力をどうぞよろしく
お願いいたします

募金受付期間：2026年10月1日から2027年3月31日



「傾聴のラインを知らせる広報事業」



- 1 チャイルドラインフリーダイヤル（0120-99-7777）番号および、チャットのQRコードを明示したアドカード179,000枚とポスター500枚を広報手段として作成する。
- 2 アドカードは市町村教育委員会を通じて、生徒60万人の内小学生に179,000枚を、ポスターは中学校388校、高等学校181校のうち500校に配布する。
- 3 千葉県教育委員会、県内54市町村教育委員会、私立学校協会の協力を得て各学校へ届ける。

- 1 「ママパパラインちば（電話番号043-204-9390）」の情報が当事者に届くようQRコードを明示したアドカードを170,000枚作成する。
- 2 県内54市町村の子育て支援課を通じて、保育園 幼稚園 子育て支援施設、保健センター、親子の居場所で配布。また教育委員会を通じて、全校児童または1年生の家庭に配布する。
- 3 千葉県小児科医会、千葉県歯科医師会、県社会福祉協議会の協力を得て地域の小児科医院、歯科医院、54市社会福祉協議会へ配布依頼する。

18歳までの専用通話
うれしいことも、かなしいことも、なんでもはなしていんだよ！

チャイルドライン千葉

電話をかける **0120-99-7777** チャットをする

通話無料
まいにち
16時～21時

主催：NPO法人 子ども劇場千葉県センター
後援：千葉県教育委員会 千葉市教育委員会
このカードは赤い羽根共同募金の助成により作成されています。

あなたをひとりにしない・させない！「ママパパライン」

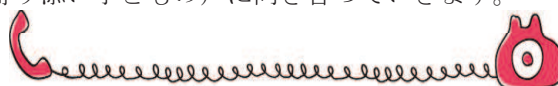
「ママパパラインちば」®

子どもをもつママ・パパ・家庭の子育ての悩みや不安な気持ちを電話でお聴きします。なまえ・住所などはおききしません。安心してゆっくりおはなしてください。電話だからこそ何でも言える。気軽にダイヤルを！

043-204-9390
毎週金曜日 10:00～16:00
キャンペーン2027年2月15日(月)～2月20日(土)
6日間毎日 10:00～16:00

<18歳までの子どもの声を聴く 子ども専用電話 チャイルドライン千葉>

子どもの自殺者数が昨年度を上回り過去最多に、不登校者数も年々増加し、子どもたちの状況は厳しいままです。権利の主体である子どもは脇に追いやられ、子どもの声が社会に届いていない現実の中、チャイルドラインは子どもと社会をつなぐ架け橋として、子どもには「聴いてもらえた」「わかってもらえた」と実感できる場所、「ここに話してみよう」「言ってもいいんだ」と思ってもらえる安心安全な『心の居場所』として、“子どもの声”を聴いていきます。そして子どもが持っている力を信じて、気持ちに寄り添い子どもの声に向き合っていきます。



<子育て中の養育者の声を聴く ママパパラインちば>

子ども・子育てを取り巻く環境が急激に変化しており、悩みごとや相談したいとき、AIに話をするという声を耳にする時代が訪れてきました。ママパパラインの会話には、生の声の響きや温かさがあり、“あいづち”や“寄り添う言葉”に、ママやパパが励まされ、癒されています。誰かと話をしたり、聴いてもらう機会が減少している今、ラインを通じて「つながっている感」は孤立感を和らげ、聴いてもらう心地よさは「話してよかった感」につながります。これはママパパラインだからこその特徴で、否定されずに受容して聴いてもらうことで、かけ手の心が回復されていくのを受け手も実感しています。

3歳からのコンサート in 木更津～はじめてのミュージカル～



「ボクたちのうた 手のひらを太陽に」 ミュージカルカンパニー イッツフォーリーズ

2026年3月14日(土)14:00～15:00 木更津市民会館中ホール 参加人数 173人 参加費無料
協力(特) 子ども劇場千葉県センター

【木更津市の重点施策】

昨年9月下旬、木更津市教育委員会文化課文化芸術振興係の方から子ども劇場千葉県センターに、木更津市民会館中ホールでの3歳からの親子向けコンサート、ミュージカル作品を紹介してほしいという相談がありました。木更津市の幼児以上の親子に本格的ミュージカルを届けたいという熱意が伝わってきて、イッツフォーリーズの作品を自信を持って提案し、決定しました。「芸術文化に親しむまちづくり振興事業の実施」は、木更津市教育振興基本計画の基本方針「芸術文化活動の活性化」の重点施策のひとつです。

【当日までの準備と当日の会場づくり】

子ども劇場千葉県センターが、主催者やホール担当との打合せ、劇団への連絡調整、当日会場係を担いました。「ボクたちのうた 手のひらを太陽に」は平土間にて舞台と約200名の客席を作ります。客席はジョイントマットとパイプ椅子の半々とするため、事前に文化課が庁内のマットを200枚かき集め前日に設営しました。当日は椅子に座りたいお客様が多い中、「こちらの方が間近でよく見えますよ」とマットに誘導、バランスよく収まりホッとしました。

【当日の子どもたちの様子】

参加型の場面では子どもたちは役者の呼びかけにこたえて前に出てきたり、その場で立ち上がって、3人の役者と一緒に音楽に乗って体を動かしダンスして楽しそうでした。セリフのやり取りが続いて幼児には難しいところもあったのですが、親子で一緒に優れた文化芸術に触れる機会になりました。文化課担当者は質の高い、王道の内容だと振り返り、市長や教育長も最後まで観劇していました。



【参加者のアンケートから】

- * 幼児の子どもと妻と参加の機会をいただきました。小さい子どもと遠出がしづらく、市内での催し物は大変魅力でした。子どもも劇に参加できる部分があり、子どもたちも演者になれて喜んでいました。また、参加部分はいくつか設けられており、舞台に立ちたい子どもを取りこぼしなく、立たせていただいたのも良かったです。
- * 暗闇や大きな音が苦手な娘が最初の導入から引き込まれて楽しそうに観ていて、照明や音の使い方が、いきなり大きい、暗いではなくて工夫されていました。
- * ミュージカルを手軽に鑑賞できる、小さな子どもが参加できる、広々としたスペースで見られるのは良かったです。知っている曲にたどりつく前に少し子どもが飽きてしまった。ですが楽しんでいたので良かったです。
- * 子育てに対する良い取り組みだと思うので、今後も続けていただきたいです。
- * 今までキャラクターのミュージカルコンサートは経験がありましたが、このようなミュージカルでも子どもの関心がとても強かったです。是非、また開催を楽しみにしております。

編集後記：昨年1年間に国内で生まれた日本人の子ども数は、10年連続で過去最少を更新しました。厚生労働省が発表した2025年の出生数は前年比2.2%減の67万1236人となり、女性1人が生涯に生む子どもの数に相当する合計特殊出生率は1.14と昨年の1.15を下回り、過去最低を更新しました。「はじめての100か月の育ちビジョン」等が、これらの課題解決へカギを切る一策となるよう願うと共に、NPOとしてできることを、NPOらしいやり方で推進していきます。